

## 傘の家から

宮里 暁美

小雨のバラつく園庭を、傘をさして、ピチャピチャと歩いていた子ども達。一人が立ちどまり、ふっとしゃがみこむ。

雨にぬれた園庭に、小さな傘、ひとつ。

先を歩いていた友達がふり返る。私も、とでも言うように。かけ戻り、一緒にしゃがみこむ。

雨にぬれた園庭に、小さな傘がいくつも重なって、色とりどりの、こんもりした屋根ができる。小さな家がでさる。

傘を使つての家作り。誰でも一度は、体験したこと

ある、この遊びの中に、家作りの魅力や要素が、たくさんつまっている。

### 〈屋根〉

ゴザを一枚敷いただけ、積木をまわりにならべただけでも、それは、立派な家。外に行く時は「いってきます」と言い、帰ってきた時には「ただいま!」と言う。

そして、くつまでそろえたりする。(写真①②)

家は、どんどん横にひろがり、部屋数が増え近所づきあいまで始まる。家の清掃も、念入りに行く。(写真③)





◀ 写真① 「ただいまー!」



▶ 写真② 「おおきな家でしょ」

◀ 写真③ 「きれいにするんだ」



何の不足もなく、そうやって遊んでいるうちに、誰かが、ポツリ、と言う。

「屋根があつたほうがいいよ。」

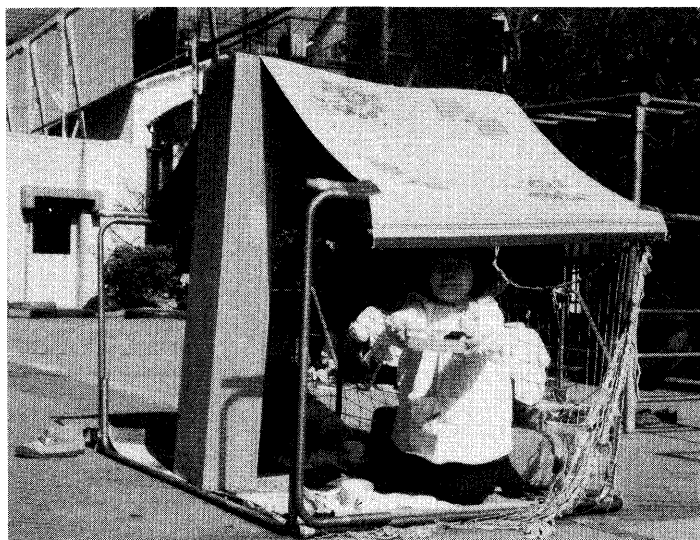
その瞬間、子ども立ちの頭の中には、どんなイメージがかんんでいるのだろうか。

布やごさは、手近な物で屋根になりやすい。それでも、かぶせた、と思うとずれてしまったり、たるんでしまったりする。私も知恵をしぼりながら、いろいろ工夫する。(写真④⑤)

屋根ができる、家は、屋根の下に限定される。それは、狭さとこわれやすさをもたらす。「屋根」という夢を実現したために、少なからず不自由さをひきうけなくてはならなくなるのだが、子ども達は、そんなことを気にかけない。家を作りあげた、という満足感でいっぱいである。

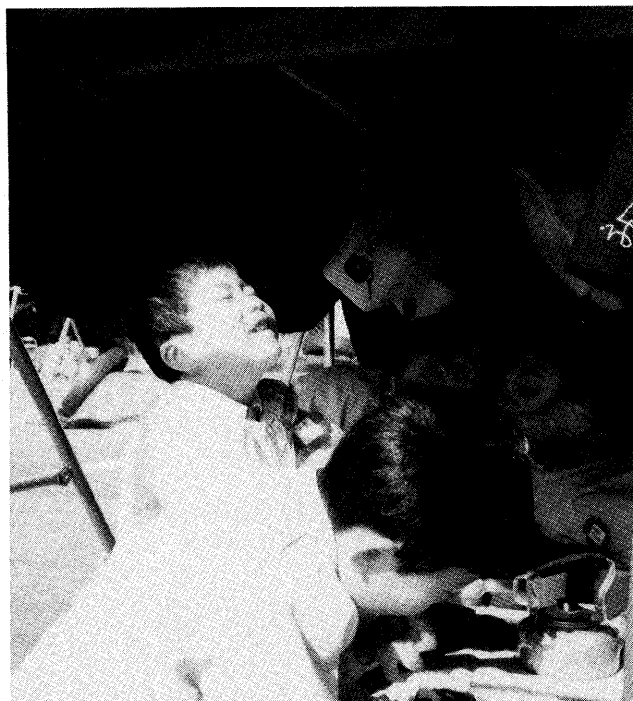
屋根を作る、ということは、簡単なことではない。一本の傘は、たやすくそれを実現したが、傘の柄にさえぎられ動きにくかったりなど不自由さも格別だった。

それでもやっぱり、屋根がほしくなる。それは、他と区切られた、「私の(達)の空間」を、深く意識させら



◀ 写真④ 自分達の家で、お弁当をたべよう。

「いただきます」



▶ 写真⑤ 「いい家でしょー!」

れるからだと思う。

### 〈光・暗さ〉

傘の家の中は、明るい水色や黄色、赤色につつまれる。光をうけて、傘の色がはえるのである。ゴザや暗幕だと、逆に薄暗くなる。光はさえぎられ、暗さがおとずれる。時には、懐中電灯を持ちこんだりもする。

自分達の家を作り、空間として区切られた時、光もまた特殊なものとなってくる。薄暗かったり不思議な色をしていたり……。そのような空間全体の印象は、子ども達の心の中に深く入りこんでいくと思う。

すっぼりと包まれたような家の中で、たっぷりと遊び、外へ出た時の、あの落差。光も、色も、音も、凝縮していたものが、サーッと散っていくように、ひろがっていく、薄まっていく。それらを瞬時に味わいながら、子どもは、思わず、

「あーあ」

と、のびをしたりする。子ども達は、こうやって、特殊

な空間と、いつもの空間を、行ったり来たりしている。

植物園を散歩していた時、同様の体験をしたことがある。

子ども達を連れて、木々の間を歩いてきた。穏かに晴れわたった春の一日。陽の当たるところは、明るかったが、大きな木が枝をのびし、空をおおいつくしているような一角は、薄暗かった。明るいところから暗いところに入り、木々の間を、うねうねしばらく歩きようやく、又明るいところに出た。その時、ほっとしたような空気が流れ、

「ここ、はじめてのところでしょ。」

「もう、夕方？」

という声がきこえた。

これもまた、行ったり来たりの体験なのだろうと思う。

実際には、ほんの短い時間だったのに、とても長く感じる。今は、いつだろう、と一瞬とまどう。そんな感覚が、「戻ってきた」時の、子どもの中にある。

自分（達）だけの家の中で、他とは違う、「私（達）の時間」を、味わっているのだと思う。

### 〈狭さ〉

「ねえ、〇〇ちゃん傘かして。」

「ねえ、△△君もかしてね。」

傘を使って、もっと大きな家を作ろうと考えた子ども達が、他の友達によびかけて傘を集めまわっている。

七、八本集まったので、それを開き、くつつけたり、上からのせたりして、今までよりは、ずっと大きな家を作った。

「入れて……」

「入れて……」

と、次々に入りたいたい子どもがやってくる。

はじめの内は、うけ入れていたけれど、とうとう満員になってしまった。

「どうして入れてくれないのよ。」

「だって、もう入れないんだもん。」

「いいもん、入っちゃう。」

そう言っつて、無理矢理入った途端、傘は、バラバラ……。

子どもの作る家は狭い。

狭いのが、魅力でもある。体をくつつけて、しゃがみこんで、息づかいを感じ合っつて。だから、狭いけれど、ずいぶんたくさんの方が入ることができる。狭い中で、ゆずり合い何となく心を通わせ合っつて遊ぶことができる。

それでも、限界はある。これ以上は、入れない、という限界がある。それは、物理的な限界だけではない。

こわれてしまった傘の家。もう一つ傘をもつてきて広くすることもできる。けれども、子ども達の遊びをみていると、ちょうどいい狭さがあるように思える。

息づかいが感じとれ、「私達」を味わい合える狭さ。それを、場合により違つうように感じとりながら、作っつていつているように思ふ。

だから、傘の家を、もうこれ以上は広くしようとはせ



◀ 写真⑥ 「この下が、ひみつのかくれ場所だよ」

ずに、新しく、もう一軒、作るようにすすめてみる。一つの傘で。

傘の家をもととして、子どもにとっての家作りについて、いろいろと考えてきた。横にひろがっていく家作りから、屋根ができ、場が限定された時、今度は、家作りは、縦にひろがっていく。

地下室（ほら穴）や、二階建てである。（写真⑥）その中で、子ども達は、先に述べた狭さや、暗さを味わいながら、さらに、上下で暮らしている感覚を楽しんでいるのだらう。

子ども達が味わっているもの、感じとっていること、それらを、もっともっと知っていきたいと思っている。

（東京都文京区立第一幼稚園）